

特集展示

Oka *Ritsuzan* 岡 笠山

～ 蕪村風絵画の継承～

2013.4.27 - 6.2

開催にあたって

現在の栗東市岡を拠点に活躍した江戸時代の画家、岡笠山を紹介します。18世紀後半ころ、東海道筋で商いをした目川田楽茶屋に生まれた笠山は、与謝蕪村に学ぶことで画業を研鑽し、ついには將軍の供覧を得て人々は榮譽にした、と伝えられています。

地域で広く愛されたようですが、その活躍を伝える文献資料が少なく、知られていることは多くありません。しかしながら、軽妙な筆致や精緻な描線を縦横に使ったその作品は、19世紀の湖国で求められた蕪村風絵画を継承したものであり、画家としての優れた資質を雄弁に語っています。

今回の特集展示では、当館がこれまでに収蔵した作品を中心に、関連資料を含めて展示しています。笠山を知ることによって、その活躍した時代・地理風土にまで関心を深めていただけましたら幸いです。

最後になりましたが、貴重な作品の出品に快く応じてくださいました個人の皆様方に、心から御礼申し上げます。

平成 25 年 4 月 27 日

栗東歴史民俗博物館

写真：岡笠山《溪声談話図》 館蔵



1. 画業を見る

郷里で活躍した画家

岡笠山（生没年不詳）は、十八世紀後半に栗太郡岡村の目川田楽茶屋、元伊勢屋に生まれた。彼について記す『近江栗太郡志』は、幼時より花鳥・人物を描くことを好み、長じて与謝蕪村に学んだとする。郷里を中心に伝来したその作品は、たしかに蕪村画の系譜に位置付けられるものであり、江戸時代の近江や東海道における美術風土を知る上で欠くことのできない存在であることを語っている。

1 古社に伝来した大作

関羽図扁額 1面

岡笠山筆
板絵著色 縦 130.6 cm 横 188.8 cm
江戸時代 19世紀
栗東市 小槻大社蔵
銘文「岡野惟〔以下、不詳〕」

栗東市下戸山に所在する小槻大社に奉納された絵馬。永正 16 年（1519）に建立された本殿（重要文化財）の長押から向拝にわたって懸けられていたため、彩色の剥落が著しい。わずかに見ることができる、画面中央に大きく描かれた騎馬人物は、右手に持つ青龍刀を下げ、左手に取った手綱を胸前に引き寄せ、馬を留めて斜め後方を振りかえる姿に表わされている。このような大作はほかに知られておらず、画面の風化が惜まれる。

また、左端に墨書痕がかすかに認められる。笠山自ら進んで奉納したものが、近隣の人々の依頼を受けて制作・奉納したものは不明だが、郷里の古社に伝来した大作として重要である。このほか、当館が現在までに紹介してきた作品の多くは近隣地域に伝えられてきたものである。いまだ知られていない作品が数多く眠っていることであろう。

山水画

十九世紀前半ころの近江で活躍した笠山は、紀楳亭（1734～1810）や横井金谷（1761～1832）など蕪村追随者の活躍を受けて、湖東・湖南の地

に定着する画風を学びとっている。

山水画は最も遺品の多い主題である。蕪村風の画法が積極的に用いられている作品や、蕪村風受容以前の系統を思わせる堅実な作品も認められる。そのため、笠山における画業の多様性を見るのに適した主題であり、謹直な山水画から、蕪村風の受容を経て、柔らかな筆致を重ねる山水画へと変化していく様子をうかがえる。

2 笠山の山水画

高士帰隱図 1幅

岡笠山筆 / 柴野碧海（1773～1835）賛
絹本著色 縦 105.5 cm 横 34.1 cm
江戸時代 文化 10 年（1813）
個人蔵
款記「癸酉春二月 / 淡海 / 笠山写」
印章「惟精」（朱文方印）
「笠山主人」（白文方印）
賛文「百丈懸泉一道明練 / 翻紳施若為清蓄峰 / 斂鋭徐行処流到門 / 前澹不声 / 癸酉仲秋碧海学人」

画面左奥に配された山岳から流れ落ちる白滝は溪谷にたたずむ家屋の背後を迂回して、右手前の水流へと続く。橋上にはその家屋に向かって人物が歩いている。山や樹木、人物を描く筆法に硬さはあるが、手堅い作品に仕上げている。比較的早い段階の作風を想像させる作品で、後の著色山水画が細く柔らかな描線を駆使するのとは明らかに異なっている。

款記の「癸酉」は文化 10 年を指し、賛者の柴野碧海（柴野栗山の養子）は着賛当時、阿波藩儒として国許と江戸をしばしば往還した学者である。具体的な伝歴が不明な笠山にとって、年記を伴う本作品は貴重であり、当代の優れた学者の賛文を得ていることも見逃せない。

3 蕪村風への関心

漁夫帰山図 1幅

岡笠山筆
紙本墨画 縦 127.4 cm 横 34.4 cm
江戸時代 19世紀
館蔵（草津市 個人旧蔵）
款記「笠山写」
印章「岡惟精印」（白文方印A）

左上方の山から流れ落ちる急流は、画面中ほど大きく開けて穏やかな水面に転じ、ほとりには二軒の家屋が並ぶ。手前には樹木の茂った岸があ

り、両岸をつなぐ橋に瓢箪を右手に下げ、竿を左手に持った人物が歩いている。おそらく家路に向かっているのだろう。

笠山作品に見る画風は多様であるが、もっとも重要な局面を占めたと考えられるのが蕪村風である。背景の山容は大胆に重ねた墨色の面と線によって肌を表わす一方、樹木の描写はたどたどしく、やや不慣れな印象を残している。このため、本図は湖東・湖南の地に流通したその画風に関心を持ち始めたころのものともみられる。

4 著色山水画様式の典型

溪荘訪友図 1幅

岡笠山筆
絹本著色 縦 104.8 cm 横 44.2 cm
江戸時代 19世紀
館蔵
款記「淡海ノ笠山写」
印章「岡惟精印」(白文方印A)
「字沖一」(朱文方印)

大きく腹の抉れた主山を左に、右後方へと山を連ねる背景として、前景に溪流の沿う書屋をおくのは笠山著色山水画における典型的な構図である。モチーフをやや近接拡大したような画面で、霞で区切られた前景には、二本の大樹が幹を交差させる。林間の書屋に世間を離れて隠逸するように人物たちが集まり、橋上の人物も従者を従えて書屋へと向かっていく。

蕪村風の表現を強めていく以前、笠山はこのような著色山水画を描くことによって一定の評価を得たのであろう。享和3年(1803)刊行『東海道人物志』には、「漢画」に長けた人物として紹介されている。

5 もう一つの文人画風

深山行楽図 1幅

岡笠山筆
紙本墨画 縦 131.6 cm 横 28.6 cm
江戸時代 19世紀
館蔵
款記「笠山」
印章「岡惟精印」(白文方印A)

山間に流れる水流は画面下へ流れ落ち、その少し上流に架けられた橋には二人の人物が歩いている。前を行くのが主人で、そのあとに従者を連れている。家屋を描いていないが、山房に住む友を尋ねて歩いているのであろう。淡墨を主に用いた山水表現で、深山に降り注ぐ日差しは暖かさに満

ちている。

また、樹木の葉を点描風に円く表わす描法には木洩れ陽を充満させるかのような雰囲気があり、蕪村と並んで日本文人画の大成者とされる池大雅の作品を思わせる。柔らかな線を重ねた樹木や山容など、蕪村風受容を機に絵画学習を広げていったのであろう。

6 柳に囲まれて筆を取る人物

柳橋文人図 1幅

岡笠山筆
絹本著色 縦 126.2 cm 横 34.1 cm
江戸時代 19世紀
個人蔵
款記「笠山」
印章「岡惟精印」(白文方印B)

柳に囲まれた橋上に騎馬人物が童子を供に連れている。壮年の人物は右手に筆、左手に紙を持ち、童子は墨をたくわえた硯を持つ。馬上の人物は、さわさわと葉音を奏でる柳の木々に、詩意を練っているであろう。

中景を流れ落ちる白滝は笠山作品に頻繁に表われる景観モチーフであるが、前景・中景・後景に有機的な繋がりには認め難い。柳の幹を描く筆線は柔らかく、同じ印章を持つ《夏景山水図》に通じるが、下草の表現や構図法など、異なる特色も多い。

7 深緑の涼やかな景観

瀑下洗馬図 1幅

岡笠山筆
絹本著色 縦 125.4 cm 横 34.4 cm
江戸時代 19世紀
個人蔵
款記「笠山」
印章「岡惟精印」(白文方印B)

白滝を眺められる高台には物見のための亭が置かれる。二人の人物が滝見に向かう途中、馬が洗われる場に出くわすと、しばし留まって見物しているようだ。流れるような描線で描かれた人物や樹木などは、清々しい空間に凜とした存在感を放っている。

《柳橋文人図》と通じる下草表現や構図法を認められるが、各モチーフはより丁寧に描かれている。なお、笠山が画材として用いる絹目はどれも細かく、街道沿いに栄えた元伊勢屋主人の豊かな財力を物語っている。

8 洗練される著色画

夏景山水図

1 幅

岡笠山筆

絹本著色 縦 126.3 cm 横 41.3 cm

江戸時代 19 世紀

館蔵

款記「淡海 / 笠山」

印章「岡惟精印」(白文方印B)

大きく腹の抉れた険しい山がそびえ、右に肌色の異なる山が連なる。合間にはシルエット状の遠山が望む。山のふもと、霞と懸崖に覆われた中景には集落があり、棹を持った農夫たちが牛を連れて談笑しながら帰っていく。右下の屋舎には機織をする女性がいる。繊細な描線と鮮やかな色彩によって、さわやかな初夏の景観を描いた佳品である。

捺された印章は比較的、後年に用いられたもの。これ以前の制作と推定できる著色山水画とは明らかに異なる描線を用いており、その彩色とともに醸し出される雰囲気も異なっている。蕪村風などを学んで作域を広げたことによって、著色山水画の画法にも変化が表われたのであろう。

9 笠山の精神世界

溪声談話図

1 幅

岡笠山筆

紙本淡彩 縦 132.4 cm 横 29.1 cm

江戸時代 19 世紀

館蔵

款記「笠山」

印章「岡惟精印」(白文方印B)

厳しくそそり立った山を背にして建つ茅屋に、二人の人物が談話に興じている。明快な筆致で描かれた画面は、澄み切ったさわやかさで満ち溢れ、渓谷へと流れ落ちる滝の音が快い響きとなって聞こえてくる。蕪村風の画法は、笠山の憧れる理想世界を描くのに適したものであったのであろう。

田楽茶屋主人であった笠山は、特定の師に学ぶことはなく、茶屋経営のかたわらに余技として作画を学んだと思われる。幾年かの年月を経て出合った蕪村風は、近江で活躍した蕪村風絵画の継承者、紀楳亭や横井金谷などに迫る位置にまで高められていく。本図は、その一つの例証となる作品である。

10 楳亭・金谷に肉薄する作品

秋景山水図

1 幅

岡笠山筆

紙本淡彩 縦 120.4 cm 横 28.4 cm

江戸時代 19 世紀

館蔵

款記「湖東 / 笠山」

印章「岡惟精印」(白文方印B)

「号茅臺」(白文方印)

紅葉した秋の山景に遠山がかすみ、瀑布が流れ落ちる麓に建つ茅屋の窓辺には、人物が寄り掛かっている。瓢箪を携えて歩く人物は友人に一献を傾けに向かっているのであろう。

蕪村風受容を転機として、その模索・学習期を経た山水画であり、蕪村や楳亭・金谷など、先達たちの画業に肉薄する出来栄えとなっている。



11 淡い代赭色を感じさせる山水図

浅緯山水図 1幅
岡笠山筆
紙本淡彩 縦 137.3 cm 横 56.3 cm
江戸時代 19世紀
館蔵
款記「笠山」
印章「岡惟精印」(白文方印B)

大きく開けた湖面の向こうには山容や林野が奥深くへと続いている。画面手前に立つ水亭から、人物が舟を出してどこかに向かっている。水原の広がりや山野の奥行きは、水亭から舟を出した人物が遠くの地へと旅立っていったことを暗示している。

背景の山容や樹木の輪郭などは柔らかな筆致を短く重ねて描き出し、湖面をわずかに青く染めるほか、山々や岩肌には淡い代赭色を感じられる。

人物画

蕪村風を学んだ笠山であるが、現在、確認できる作品のうち、最もその影響を顕著に表わしている主題は人物画である。その画題は、漁夫や樵夫など身近な存在から、古典や故事に由来する人物まで及ぶ。

活写された人物画の特徴は、日常を生きる村々の人物のたくましさや朴訥さ、誇張気味に捉えた面貌描写の滑稽味などに表われている。描かれた人物たちの表情の豊かさには、蕪村画の系譜を継ぐ画家として位置付けられるに足る優れた技量を見ることができる。

12 眼光鋭い老人たち

騎馬四老図 1幅
岡笠山筆 / 香川景樹 (1768 ~ 1843) 賛
絹本著色 縦 98.5 cm 横 68.7 cm
江戸時代 19世紀
個人蔵
款記「淡海 笠山写」
印章「岡惟精印」(白文方印A)
「字沖一」(朱文方印)
賛文「谷の門をむれて / いでたる黄鳥の / 声長閑なる 御代 / の春かな 景樹」

個性的な面貌の高士四人が馬に乗って談じている。賛文によれば、山中の谷間から出てきた四人

の隠者は、黄鳥の声を聞き、のどかな春の風情を感じとっているのである。人物の白髪混じりの髪や髭、馬のたてがみ・尾など、細やかな線を用い、鞍橋前輪や面繫などの馬具に用いる金泥は衣文線にまで及ぶ。柔らかな線を用いる蕪村風人物画が多い笠山にあつて異彩を放っている。

様々な人物・商品が往来する東海道の一角に生まれ育った笠山の画業は、街道を通して流通した絵画を学ぶことから始まったのであろう。また著名な歌人である賛者は、笠山の生家を訪れていたかもしれない。

13 高揚する羅漢(超人)たち

羅漢図 1幅
岡笠山筆
紙本淡彩 縦 122.8 cm 横 55.6 cm
江戸時代 19世紀
館蔵
款記「笠山」
印章「岡惟精印」(白文方印C)

白衣や黒衣をまとい、宝塔を中心に集まった八人の羅漢。画面中央の宝塔を見入るもの、宝珠を手にして念じるもの、袖の中で手を合わせるものなどいるが、各羅漢の尊名を特定するのは難しい。現前に現われた宝塔を拝して高揚する羅漢たちの左側には、本来、対となる羅漢図があつたのであろう。ユーモラスな表情が親しみやすく、やはり蕪村画の系譜にあるものだ。

宗教的な寓意はほとんどなく、人物の面貌のうち、幅の広い鼻梁、ひときわ張り出た頬骨、見開き飛び出そうな目、噛み締めた唇など、羅漢たちの表情の豊かさ表現の主眼を置いているのであろう。ちなみに笠山の生家は浄土真宗の門徒であつた。

14 風雨に立ち向かう謎の人物

承仕法師図 1幅
岡笠山筆
紙本淡彩 縦 135.3 cm 横 49.7 cm
江戸時代 19世紀
個人蔵
款記「笠山」
印章「岡惟精印」(白文方印C)

承仕法師とは、寺院の雑用を勤める下級の僧のこと。『平家物語』「祇園女御」段では、祇園女御の宿所近くの御堂に鬼が出現するという噂がたち、平清盛の父、忠盛が生け捕りにしようとした。そこに現れたのは、小麦の藁を笠のように引き結ん

で頭に被り、手瓶を持った承仕法師であったという。本図に描かれるのはまさに承仕法師であり、このようなモチーフを画題とする作例は珍しい。

顔をわずかに後方へ振りながら、前方より吹きすさぶ風雨に立ち向かう人物を描く。風に吹かれて鈍く揺れる、雨を含んだ黒衣を墨調の変化で表わす描写など、その優れた画技は笠山の代表作とするに申し分ない。また、本紙の墨色には暈目が浮き出ている。こうした痕跡には、宴席などの場に即興で筆を振った可能性を見られる。

15 漁師・木こりに迫る

漁樵図 双幅

岡笠山筆

紙本淡彩 右幅 縦 127.8 cm 横 55.6 cm

左幅 縦 129.5 cm 横 55.6 cm

江戸時代 19世紀

館蔵

款記「淡海／笠山」(右幅)

「笠山」(左幅)

印章「岡惟精印」(白文方印C)

「茅臺」(朱文方印)



右幅には肩に乗せた竿に籠を掛けて担ぐ老相の漁夫と童子、左幅には杖を持ち、柴を下ろして腰掛ける老相の樵夫を描く。墨のにじみを多用しながら表す衣の描法は笠山人物画によく見られるもので、人物たちは朴訥とした表情を見せている。たつぷりと蓄えた髭、大振りの鼻、まっすぐに前方を見据える瞳や、目尻の下がった優しい瞳など、面貌描写の豊かさを実感できよう。

漁夫や樵夫は身近な村々に生きた人々であり、

幼時より花鳥・人物を描くことを好んだと伝えられる画業の本質をうかがうことのできる作品と言えよう。なお本作品は、もと二曲一隻の屏風装であったが、近年の修復に伴い掛幅の仮表装としている。

16 笛の音にうたた寝する木こり

樵夫聴笛図 1幅

岡笠山筆

紙本淡彩 縦 122.1 cm 横 55.6 cm

江戸時代 19世紀

館蔵

款記「湖東／笠山」

印章「岡惟精印」(白文方印C)

「茅臺」(朱文方印)

横笛を吹く人物が後方に立ち、その眼前では樵夫が目を閉じて笛の音色に聞き入っている。画面を見るものにも心地よい音色が伝わってくるようだ。

山で刈ってきた柴に腰を下ろす樵夫の姿態は、《漁樵図》双幅など、ほかの作品に通じるものがある。おそらく粉本を用いて頻りに描いた画題であり、東海道を行き交う旅人にも人気を得たのであろう。款記に記す「湖東」は、遠方からの注文に応じて、あるいは、街道を行き交う旅人の土産用として制作されたものであることを示唆している。

花鳥画

花鳥画には、円山・四条派や長崎派など十八世紀後半に東海道を経て各地へ広まった画風を学んだ痕跡を見出すことができる。

たとえば、特に好んだモチーフである梅は、付立風に描いたものからたつぷりと墨を含んだ筆で大胆に描きあげるものとなる。濃厚な墨色を用いた画法は、独自の表現へと昇華していったことを予測させる。あるいは、虎のように細密に描きこんだ作品もあり、東海道を旅した数多くの画家や文物に学んだ画業の在り様をうかがえる。

17 刷毛で一筆描きしたような梅

墨梅図 1幅

岡笠山筆

紙本墨画 縦 42.0 cm 横 63.0 cm

江戸時代 19世紀

館蔵（湖南省 愍念寺旧蔵）

款記「笠山写」

印章「笠山」（朱文方印）



付立風の描写による墨梅図。「付立」とは円山応挙（1733～1795）が得意とした描法で、刷毛などに含ませる墨に濃い部分と淡い部分を設けて、一筆で描くうちに濃淡を表わすものである。

捺された印章は、比較的初期に用いたものである。十八世紀末頃から十九世紀にかけての東海道筋では、京で応挙の画風を学んだ画家が少なからず活躍しており、そうした画家の手ほどきを受けた成果を示すのかもしれない。本図よりも後年の制作と思われる墨梅では、一段と濃厚な墨色の幹や枝が躍動する、澆漓とした筆遣いを特色とする作品になっていく。

18 疑惑の年紀

墨梅図

1幅

岡笠山筆

紙本墨画 縦 138.2 cm 横 56.2 cm

江戸時代 文化 13年（1816）頃

栗東市 個人蔵

款記「丙子抄夏為栗斎 / 笠山写」

印章「岡惟精印」（白文方印A）

「字沖一」（朱文方印）

右下から伸び上がる梅の樹木は、濃厚な墨色で輪郭ごと幹を描きあげ、あるいは、淡い墨線で輪郭を示して内側に示される樹皮は擦れのある筆致で余白を残しながら充填していく。構図や描法には「岡惟精印」（白文方印B）を捺す《墨梅図》に通じるものがある一方、モチーフ周辺に淡墨をめぐらせて内側に素地を塗り残す手法は用いておらず、墨梅作品のなかで中間的な位置にある。

款記のうち「丙子抄夏為栗斎」は、笠山自筆でない可能性もある。干支が明治9年（1876）を指すならば、笠山落款に追記されたことになる。同年には、当地きっての文化人、山本清之進（号栗

斎、1843～1909）が栗太郡第二区区長に当選しており、これを祝うために贈答したことを示すのかもしれない。いずれにしても、笠山自筆の款記や作風から文化末年ごろの制作とみることに問題ない。

19 早春を感じさせる雪の表現

雪梅図

1幅

岡笠山筆

絹本墨画 縦 99.9 cm 横 31.9 cm

江戸時代 19世紀

大津市 個人蔵（草津市内伝来）

款記「笠山」

印章「岡惟精印」（白文方印B）

「号茅臺」（白文方印）

左下方から伸び上がる梅の幹には雪が積もり、枝先に花を開かせている。幹から伸び上がる枝は前面へと屈曲して、先端は二股に枝分かれする。その間を分け入って別の枝が伸びていく。

背景を淡墨で刷くことで梅樹のおおよその輪郭を確定させ、幹や枝、花弁を線描する。その内側は塗り残している。淡墨や濃墨を丁寧に使いつけて、しっとりとした雰囲気を演出する。そうして描かれた積雪は、幹の上で舞い散り、枝葉からかすかに落ちていく。早春ならではの叙情的な表現を狙った温雅な作品と言えよう。

20 繰り返し描いたモチーフ「梅」

墨梅図

1幅

岡笠山筆

紙本墨画 縦 133.6 cm 横 54.3 cm

江戸時代 19世紀

個人蔵

款記「笠山」

印章「岡惟精印」（白文方印B）

左上に伸びる幹は、濃墨を主体に荒々しく描かれ、上方へ弓形に伸びていく幹は、墨の掠れに塗り残しを加えて描かれる。一見すると、二本の異なる幹が中に浮いているように見えるが、実際には、画面右下から一本の老梅が伸びて、幹が分かれているのである。

さらに注意深く観察すると、幹のほか白い梅花も塗り残されていることが分かり、モチーフの周囲には墨あるいは代赭を極めて薄く刷っていることに気付かされる。その表現は、にわかに判断できないほどさりげないが、実に丁寧に行われている。

21 細密な線で毛描きされた虎

双松猛虎図 1幅

岡笠山筆

絹本着色 縦 125.6 cm 横 44.7 cm

江戸時代 19世紀

個人蔵

款記「笠山」

印章「岡惟精印」(白文方印B)

蕪村風の表現を熱心に学んだ笠山だが、本図のようにモチーフを細密に描いた作品も伝えられている。江戸時代、中国から長崎にやって来た沈南蘋の画風が流行して以来、円山応挙や岸駒など京周辺で活躍した画家らをはじめとして、細密な毛描きを特徴とする虎の絵が数多く制作された。

本図もその流れを受けたもので、虎の毛描きは細く短い線を絡ませるように施している。そうした絵画の源流は長崎派であるが、笠山もやはり学んだのであろうと思わせる虎の絵が別に伝わっている。蕪村風の受容とともに、笠山が学んだものは少なくなかったようである。

22 墨色に特徴のある鶴

立鶴図 1幅

岡笠山筆

紙本淡彩 縦 126.6 cm 横 52.5 cm

江戸時代 19世紀

館蔵

款記「笠山」

印章「岡惟精印」(白文方印C)

「茅臺」(朱文方印)

顔を横に振り向けた丹頂鶴が左脚を挙げて立つ。画面にはその背面と横顔を捉えている。鶴の周囲には、画面全体にわたって霞状に淡墨を刷いているが、十八世紀後半に流行した長崎派絵画の画法と類似している。

しかし、鶴の描写は長崎派などの細密な作風ではなく、輪郭線に蕪村風学習に由来すると思われる柔らかな筆致を用いている。また、首筋あたりの体毛や尾はねを表わす濃墨の施し方には、笠山得意の墨梅図を連想させる性質がある。

2. 周辺を探る

東海道と目川田楽

江戸・日本橋から京・三条大橋までをつなぐ東海道五十三箇所の宿場のうち、石部宿と草津宿の間には目川立場と呼ばれる休憩所が置かれていた。

目川立場に隣接した笠山の生家・元伊勢屋は、菜飯と豆腐田楽の膳を売る人気店であった。当地を代表する道中名物となった「目川田楽」は名所案内や地誌類にも頻繁に取り上げられ、往時の活況を伝えている。生家には数多くの旅人が立ち寄り、なかには手ほどきを頼んだ画家や手本となる作品もあったことであろう。東海道の一角に生まれた笠山にとって、街道の生活から受けた恩恵が大きかったことは想像に難くない。

23 東海道筋の人名録

東海道人物志(昭和29年復刻版) 1冊

大須賀鬼卯(1744~1823)編

紙本墨刷 縦 15.5 cm 横 11.1 cm

近代[江戸時代 享和3年(1803)刊]

館蔵

編者が交流を持った人物を中心に、東海道品川駅から大津駅までの駅路2里以内に在住する武士以外の人物で、歌人、漢学者、俳諧師、画家など35項目にわたる文化人を紹介する。大須賀鬼卯は遠江国日坂宿(現、静岡県掛川市)で執筆しており、本書は江戸・京・大坂の三都に所在する書林から刊行された。

「石部駅」の最後には「漢画 名惟精 字中一号笠山 目川岡野五左衛門」と記されており、画風転換前の笠山に対する評価を示している。また当時、すでに五左衛門の通称を継いでいることも判明する。ほかの人物では、当地附近「大津駅」に蕪村の弟子・紀樸亭の名が見え、「画」に長じるとする。さらに東方の宿場で活躍した人物名を見れば、京を中心に展開した円山・四条派や岸派に学んだ画家も散見でき、拡大する京画壇の勢力を知ることができる。

24 諸国で活躍した画家名鑑

現故漢画名家集鑑 1冊

大島恭凡例

紙本墨刷 縦 117.9 cm 横 67.2 cm

江戸時代 安政4年(1857)頃刊
館蔵

安政4年11月、大島恭なる人物が記した凡例によれば、土佐派、狩野派、琳派、円山・四条派、岸派などについては別に取り上げているため、本書では「漢画家」を採録したとする。取り上げた人物の姓・名・字・号は伝聞に基づき、「序次」を論じるものではないと注するが、その画家名の大小は明らかに有名・無名の差異を表わしている。

笠山については、左下方に位置する「宗派錯雑」の項目のうち、上から5段目、左から4番目に小さな文字で「近江 岡野笠山」と記す。展示品は、難波・三河の人物が編纂に当たり、年代を下って難波・江戸の人物が増補校訂を行ったものである。東海道という大動脈を背景とするからこそ、笠山という画家は認識されたのである。

25 名物 目川田楽

菜飯・豆腐田楽(複製品) 1膳
現代
栗東市 岡自治会蔵

石部宿から梅ノ木立場を経た後、草津宿に到着する前にあった目川立場(栗東市岡)では、隣接して三軒の茶屋 元伊勢屋・小島屋・京伊勢屋が並び、季節の菜飯と白味噌を付けて食べる豆腐田楽を供した。地元では、その発祥を笠山の生家・元伊勢屋であったと伝えている。

江戸時代末期から近代にかけて、交通機関の発達が街道の生活に変化を及ぼし、最後まで営業をしていた京伊勢屋が閉店するに至って、目川立場の田楽茶屋の歴史は終焉することになった。なお近年には、地元有志によるサロンが予約制で目川田楽を提供している。

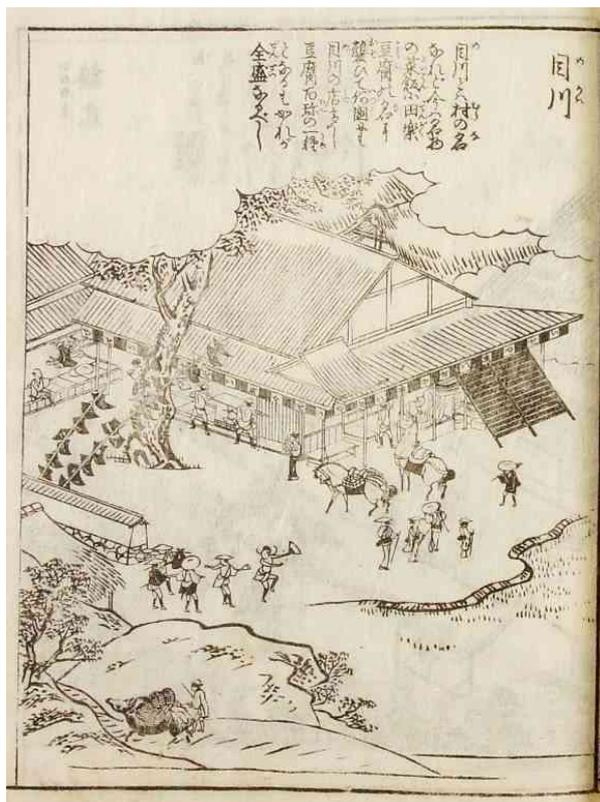
26 田楽茶屋を紹介するガイドブック

東海大名所図会 巻二 1冊
秋里籬島編
紙本墨刷 縦25.4cm 横18.2cm
江戸時代 寛政9年(1798)刊
館蔵

挿絵に描かれるのは、立派な店構えに暖簾を掲げた京伊勢屋。店内でくつろぐ旅人、塀のそばで踊るもの、いそいそと膳を運ぶ女中など、目川立場で商いをした田楽茶屋の活況を良く伝えている。近隣にあった笠山の生家、元伊勢屋の繁盛ぶりをも容易に推察できる。

同書は、目川といえば本来、東海道筋の村名を

指すが、時代が下ると、むしろ菜飯に豆腐田楽の通称で知られるようになったという。さらに、どの国でも「目川の店多し」と記しており、目川田楽は立場から全国へと広がっていったのである。



27 石部・草津間を代表する名所絵

東海道五十三次之内 石部(複製版) 1枚
歌川広重(1797~1858)画/保永堂版
紙本多色刷 縦18.2cm 横24.7cm [大判錦絵]
近代 [江戸時代 天保4年(1833)頃刊]
館蔵(里内文庫 306 78)

歌川広重の出世作として知られる「保永堂版東海道」のうちの一点に、目川立場の田楽茶屋・京伊勢屋が描かれている。本シリーズ以降、東海道五十三次を題材とする揃物をたびたび発表した広重だが、この保永堂版が最もよく知られている。

モチーフ・構図など、『東海大名所図会』に見られる挿絵をもとにした可能性のある本図が「石部」として選択されたのは、目川田楽茶屋が石部宿から草津宿までの区間を代表する名所として広く認知されていたことによる。

28 家業から画業への転機

元伊勢屋借受願書 1通
上山依村借主新七ほか差出
紙本墨書 縦24.5cm 横34.2cm
江戸時代 寛政12年(1800)7月付

館蔵

目川立場の田楽茶屋として知られた元伊勢屋は五左衛門家が営む店であった。五左衛門という通称を継ぐ歴代主人の生没年は必ずしも明らかにできないが、この時の主人については画家として知られた岡笠山であった可能性がある。

本書では、親類である上山依村（現、栗東市御園）の新七から膳所藩奉行所へ宛てて、家計困窮のために元伊勢屋を借り受けて営みたいと願っている。願出の通りに認められたとすれば、この時の貸付を転機として、笠山は絵画制作にいそむることになったのである。なお笠山の没年は不明だが、その息子・常次郎は弘化2年（1845）以前には五左衛門の通称を継いだことが分かっている。

29 田楽茶屋の行方

元伊勢屋永代譲渡状 1通

岡村元伊勢屋孫四郎ほか差出
紙本墨書 縦 28.6 cm 横 55.7 cm
江戸時代 安政5年（1858）10月付
個人蔵

新七に店を貸し付けた後、元伊勢屋の経営はどうなったのであろうか。

笠山の息子・常次郎には長男・太郎兵衛、次男・五兵衛、三男・孫次郎（孫四郎）がいた。主人を継いだ太郎兵衛は、この譲状が出される直前に亡くなっている。次男の五兵衛は嘉永6年（1853）までに分家し、ここでは「親類」として捺印する。長兄の急死により、五左衛門家の最年長男子となった孫次郎は、「五左衛門」の名を継ぐことになると同時に店を手放すことを決心したのである。

五左衛門家は座敷や表門など元伊勢屋に関する一切と引換えに十九両もの金子を手に入れ、元伊勢屋の権利は同地の青木新助家に委ねられた。街道の生活の変化を受けて、笠山生家の命脈は途絶えることになったのである。

交友を求めて

笠山周辺における重要な画家には、蕪村風を近江の地に広めた紀樞亭や横井金谷を挙げるべきである。しかし、ここでは、より広範な視野を求めて二人の画家に注目する。一人は藤原雪山（月亭斎）、もう一人は大倉笠山である。ともに笠山との関係を想定できる存在というわけではないが、周辺を探るに当たって無視することのできない人物である。

また、地元では岡村地山古墳附近に庵を結んで作陶をしたと伝えている。その出土品を併せて紹介する。

30 岡笠山《立鶴図》の対幅

桜に小禽図 1幅

藤原雪山（月亭斎）筆
紙本著色 縦 124.0 cm 横 51.6 cm
江戸時代 19世紀
館蔵
款記「月亭斎雪山」
印章「藤原」（白文方印）
「雪山」（白文方印）

右下方から斜めに伸びる桜の幹から生えた枝に三分咲きの花弁を表わし、花弁の描かれぬ枝には文鳥を添える。墨画によって表わした幹の質感描写や、胡粉で描いた花弁に芳しい香りを与える桃色の色付きなど、桜の特徴をよく捉えている。桜の描写に比べて、文鳥の描写はやや拙い印象をぬぐえない。

藤原雪山（月亭斎）の伝歴は不明だが、作品の主題は桜の画家として知られる三熊花顔（1730～1794）や織田瑟瑟（1779～1832）などを想起させる。たとえば瑟瑟は笠山と同時代に当地附近で活躍しており、その周辺で活動する人物に雪山がいた可能性も考えられる。本品が笠山《立鶴図》と対幅になった経緯は不明だが、地方で活動した画家たちの交流を想像するのにも興であろう。

31 もう一人の「笠山（りつざん）」

柳鷺図 1幅

大倉笠山（1785～1850）筆
絹本著色 縦 124.6 cm 横 42.0 cm
江戸時代 19世紀
個人蔵
款記「笠山逸人写」
印章「大倉穀」（白文方印）
「墨英」（白文方印）

左下方から斜めに立ち上がる柳の幹に三羽の白鷺をとめ、背景には全面に淡墨を刷く。丸めた背が愛らしい白鷺は、流れるような筆致の墨線で体躯の輪郭を示し、胡粉による丁寧な毛描きを施していた。頭上では柳の枝葉が枝垂れている。現状、著しい剥落は惜しまれるが、長崎派風の細密画法で描いた作品である。

大倉笠山は山城国笠置（現、京都府相楽郡附近）出身で、尾張の中林竹洞（1776～1853）に画を学

び、頼山陽(1781~1832)に詩を学んだ。同時代に活躍し、同じ雅号を用いて作画に長けたという以外、岡笠山との接点は見当たらない。しかし、このため二人の作品が混同されることもあり、当館に持ち込まれた経緯のある本品はまさにその例であった。

32 伝承の痕跡

土鍋焼台・行平断片

一括

地山古墳窯跡(地山窯)出土

陶製

江戸時代 19世紀

栗東市教育委員会蔵

栗東市岡には、周濠を含めて全長110mに及ぶ帆立貝形の前方後円墳、地山古墳が残る。その前方部や後円部の斜面からは陶磁器や窯道具が出土しており、近世の窯跡が想定されて地山窯と名付けられた。

出土品のなかで、土鍋の焼台は、十八世紀中ごろから十九世紀初頭にかけて稼動した旧蒲生郡・石塔窯や伊賀・弥助窯から出土したものと類似しており、素焼き状態の行平は、ここで生産されたものである可能性を示している。行平の出現は、全国的にみて1820年代頃からであり、本品もこの年代に位置付けられる。これらによって推定できる窯の稼動年代は、笠山の生きた時代に合致することになる。

地元では、笠山がこの古墳附近に庵を結んで、焼き物をしたと伝えている。地山窯を使った人物については明らかでないが、笠山がここで絵筆を染めながら焼き物をした可能性は大いに考えられてよいだろう。

コラム展示 岸派の粉本

岸駒(1747/56~1838)を祖とする岸派は、十八世紀後半から近代まで京滋地方を中心に活躍した画派である。その作品は今日にも数多く伝えられている。十九世紀には、岸派に学んだ画家が東海道をわたって駿河国(現、静岡県)などでも活動の場を広げている。

ここに紹介するのは岸家の分家筋に伝来した模写・下絵などの絵画資料(粉本)であり、それらの原図が残されている場合も多い。笠山が活躍した当時、東海道で流通した絵画の一端を示してくれることだろう。

参考1 岸派といえやっぱり「虎」

竹虎図屏風模本

4副1鋪

岸駒原図

紙本墨画 縦162.8cm 横218.2cm

江戸時代 19世紀

個人蔵(岸派絵画資料 12)

裏書「竹二虎」/「屏風虎 同功館」

短冊「天 虎 三拾 共四」

帯紙「天開翁/竹虎/屏風片/現在/共四」

四副の紙片を組み合わせることで屏風四扇分の画面を再現する。竹を背景とする画面では、岩上に前脚を掛けて身を乗り出す虎が、眼光鋭く睨みを利かせている。紙片の裏書や一括する帯紙には「同功館」や「天開翁」とあり、すなわち岸駒による「竹虎図屏風」を写したものであることを記している。

岸派の祖、岸駒の名声を高めたのは、実物と見まがうほどに躍動感あふれる虎の絵であった。初期には実物とは程遠い姿の虎を描いたが、のちに虎の骨格を手に入れたことなどをきっかけに、岸駒といえ「虎」と称されるほどのものになっていくのである。

本図は、岸駒の描いた虎が、粉本の継承とともに、岸派の画家たちに受け継がれていったことを示している。

参考2 円山応瑞を仲介とする作画

樵夫山水図模本

1鋪

岸駒原図

紙本淡彩 縦114.5cm 横38.3cm

江戸時代 文化4年(1807)模写

個人蔵(岸派絵画資料 39)

裏書「文化四年歳在丁卯春三月模/漁樵 双幅 樵者 虎頭館所蔵/可観堂所図円山主水紹介」

短冊「天 山 五 共二」

山道を行く樵夫を表わした山水図の模本。その原図は岸駒の筆になるものと思われるが、裏書には、漁夫を描く山水図との対幅であったこと、制作に当たって文化4年当時の円山主水すなわち応挙の子・応瑞が仲介したものであることが伝えられている。

岸派絵画資料には、原図の制作依頼について「紹介者」情報を併記するものも多く、交流関係を把握するのに重要な役割を果たしている。岸派画家の多彩な交流は、京周辺に留まらず、各地に広がっていったことが知られている。

参考3 力強い人物描写は岸駒そのもの

馬師皇図模本 1 鋪

岸駒原図 / 近藤有芳模写

紙本淡彩 縦 148.3 cm 横 132.8 cm

江戸時代 天保3年(1832)模写

個人蔵(岸派絵画資料 68)

款記「 / (印)」

裏書「天保三年壬申六月中浣 / 馬師皇 / 千里館蔵」

短冊「天 人 九拾四」

松樹を背景に、神妙な面持ちの人物が龍の口元に手を伸ばしている。中国の神話で、黄帝の頃(紀元前 25 世紀)に馬の治療を極めた馬師皇という人物がいる。ある時、一匹の龍が病気を癒すことのできるものとして師皇を見定め、師皇はこれに応じて、口に鍼を指し薬草を飲ませて治療したという。かたわらの従者は治療の様子をうかがいつつ、湯煎した薬草を龍に飲ませる準備をしているのである。

裏書に「千里館蔵」とあるのは、岸駒の息子・岸岱に学び、京で活躍した「近藤有芳が模写したもの」ということになる。人物や衣文を表わす筆圧の強くて太い墨線や、しっかりとした面貌描写など、原図の雰囲気をよく伝えている。

参考4 「梅亭道人」 = 紀楳亭?

唐人物に虎図模本 1 鋪

岸駒原図

紙本墨画 縦 99.5 cm 横 51.7 cm

江戸時代 19 世紀

個人蔵(岸派絵画資料 98)

款記「梅亭道人見恵自画人物 / 因奉謝拙画 落観
(印)(印)」

短冊「天 人 百六拾八」

虎が杖を持った人物の前に座り、やさしく見遣る人物がその背をなでている。戯画的な表情や大雑把な毛描きを見せる虎の表現は岸派のものとは異なっており、写し取られた款記が示すように、楳亭作品を髣髴とさせるところがある。

天明8年(1788)の京中大火に罹災して後、湖南大津に移住した楳亭は、移住前には洛中で画名を高め、移住後もしばしば洛中に通ったようである。岸家の本家筋に伝えられる絵画資料にも、楳亭の紹介によって岸駒が筆をとった作品の模本が見出されており、画家同士による盛んな交流の実態をうかがえよう。

岡笠山について 伝記・作品・環境から

栗太郡岡村で活躍した画家、岡笠山。どのような画家なのか、すぐに思い浮かべられる人は少ないでしょう。しかし、戦前までに作成された郷土史誌をみても、比較的知られた存在だったように思われます。そこで、まず近代に編さんされた郡志などに見られる笠山の略伝を紹介します。

略伝

大正 15 年（1926）に刊行された『近江栗太郡志』は、滋賀県内の郡志編さんにおける草分け的存在、中川泉三を中心として編さんされました。地域に残る史資料を渉猟した中川泉三の編さん態度は、良質な歴史研究としての性格を備えたものとして評価を得ています。本書における岡笠山に関する記述は、巻三第十三編「人物志」にあり、以下のように伝えています。

岡笠山

岡笠山は目川村（治田村ノ目川）の人五左衛門といひ、家号を元伊勢屋と呼ぶ、東海道の沿ひ目川の菜飯田楽を以て有名なる伊勢屋なり笠山幼にして画を好み暇あれば人物花鳥の形を画く、長じて京都に出で与謝蕪村に師事し練磨研習す、能く師法を受け筆神に入る画名漸く高く遠近画を請ふ、遂に幕府の命に依じて揮毫し將軍の覽に供す人にて榮誉とす、又金属の彫刻に妙を得たり、其遺品人争ふて之を買ふ、没年詳ならず。

また、『近江栗太郡志』に先立つ明治 38 年（1905）刊行の山本清之進編『栗太郡誌』乙編卷之十六「名家及人物」にも、岡笠山の略伝が伝えられています。

岡笠山^{画家} 岡笠山は治田村大字目川の人なり、通称五左衛門〔門〕と曰ひ、家号を元伊勢屋と呼ぶ、性美術〔を〕好み、幼にして丹青に志し、遂に与謝蕪村に師事し、能く其師法を守り、筆神に入る、最も人物画に巧みなり、所描の肖像、宛然活るか如し、晩年に至り、其技益進み、声名四方に聞へ、徳川幕府召して某図を作〔ら〕しめ、將軍の覽に供するに至る、又金属の彫刻に妙なり、後人其彫刻物を探求し、競買以て愛蔵するもの多しと云ふ。

これらによれば、笠山は蕪村に師事した後、幕

府に召されて將軍のために揮毫するまでになったということになります。生没年は明らかではありませんが、天明 8 年（1787）生まれの長子を持つと思われる笠山にとって、天明 3 年（1783）に没した与謝蕪村に師事することは時期的に難しかったでしょう。とすると、笠山が「蕪村に師事」としたのは、その作品の特色が与謝蕪村に学んだことをうかがわせるものであった、ということによるのでしょうか。また、目川（あるいは川辺）出身の優れた彫金師として奥村菅次（1788～1840）が知られていますが、「金属の彫刻に妙を得たり」というのはこの二人を混同した結果なのではないでしょうか。実際のところは分かりませんが、地山古墳附近に庵を結んで焼き物をしていたとも伝えられるように、家業のほかには画業一辺倒であった、というわけではなく、東海道の一画で多彩な風流生活を送っていたように思われます。なお、昭和 9 年（1934）刊行『大日本書画名家大鑑』伝記下編の「笠山」の項は、ここに掲げた郷土史誌の内容に準拠したものと思われる。

代表的な作品として

さて、その作品をみてもみると、山水画を例として、謹直な著色画様式から柔和な水墨画・淡彩画様式へと移行していく傾向を見て取ることができます。作風の変化に伴って、はじめ「笠山写」とした款記スタイルは「笠山」へとスタイルを変え、その書風をも明確に変化させています。また、款記の変遷は、印章の変遷とも連動しています。確認できる印章は多くありませんが、「笠山」朱文方印や「惟精」朱文方印を用いた時期から、「岡惟精印」白文方印へと至り、その文面は以降、三つの印章に流用されています。こうした点を総合してみると、笠山の作風転換は文化末年ころからの動向とみることができ、当時、近江の地で活躍した紀樞亭や横井金谷の作品に触発されたのであろうことを想定できるでしょう。

今回の展示において出品した作品のうち、山水画では、文化 10 年（1813）の《高士帰隠図》や、それよりも少し時期の下った頃の制作と思われる《漁夫帰山図》などが未だ画技の進んでいない時期の作品とみられます。しかし、後年のものと思われる《溪声談話図》や《秋景山水図》などをみると、作風の優れた爽快な作品となっており、蕪村風を学んで画業を研鑽した笠山にふさわしい展開を示しています。また、享和 3 年（1803）刊行

『東海道人物志』には、石部宿から草津宿までの間に位置した、目川立場で名のある画家として紹介されていますが、現在までに確認できる作品に関する限り、その当時には、必ずしも優れた作域に至っていなかったということになるでしょう。

人物画においては、先に記した印章のうち、晩年に用いたのであろうと推測する「岡惟精印」(白文方印C)を捺すものが多くあります。それらは、横幅のある比較的大きな画面に力強い墨線で捉えた人物を描き出しています。《承仕法師図》や《漁樵図》双幅、《樵夫聴笛図》など、太い墨線で輪郭を描き、衣には墨を含んで濃淡をつけながら衣文を表わしますが、このような人物画は笠山が好んだ画法によっているようです。決して華やかな画面ではありませんが、朴訥としながらも力強さを兼ね備えた描写は、見るものに温かな心持ちを共有させてくれるようです。さらに注目すべきものとしては《関羽図扁額》があります。郷里の古社に伝来した大きな絵馬で、彩色の剥落こそ惜しまれますが、かすかに残された墨線には充実した筆力を感じられるでしょう。

花鳥画では、特に「梅」をモチーフとした作品が多く知られています。墨をたっぷりと含んだ筆で描かれた「墨梅図」は、やはり笠山が好んだ画題なのでしょう。現在、30点余りを数える笠山作品のうち、少なくない数を占めています。力強い梅樹の伸びやかさには、得意の人物画が連想されますが、同じ梅樹を描くものであっても《雪梅図》はやや趣をたがえています。また、《双松猛虎図》のように、描線を細かく用いて描いた虎の表現などもあり、笠山が育った作画環境の豊かさがかがわれるでしょう。

笠山をとりまく地域環境

笠山を紹介する『東海道人物志』は、享和3年時点で活躍する各宿場町附近の文化人たち600余名を取り上げており、そのうち作画に長じた人物として総計71人を挙げています。現在では、笠山を含めて、ほとんどが忘れられた画家として憂き目を見ているようですが、本書に取り上げられた画家には何かしらの共通項があったはずで

す。わずかに事績を知ることができるのは、旅人が立ち寄る名園や旅籠、酒造などの家業を受け継ぎながら絵筆を持った画家たちのようです。たとえば、東海道を代表する名園「帯笑園」によって広く知られた原宿問屋・植松家の応令や、興津宿酒造・山梨屋の鶴山は、中央で活躍する画家、円山応挙や岸駒に学んだ画家として知られています。そうした関係を築くことができたのは、街道を往来する旅人との出会いをもたらす家業があったからに他なりません。

さらに湖東の石部・草津に対して、瀬田川を挟んだ湖南の大津では、天明8年(1778)から文化7年(1810)まで襟亭が在住し、文政7年(1824)には金谷が移り住んで活躍しました。同時期に活動した笠山の作品は、彼らの作画に触発されたかのように蕪村風の描法を強めていることから、山本清之進が『栗太郡誌』において「晩年に至り、其技益進み」とするのは、蕪村風絵画継承の様子を指摘するものといえるでしょう。

街道の往来によって栄えた目川田楽茶屋に生まれた笠山は、様々な作風を取り入れて画家として成長していきました。その作画環境が街道の生活と切り離せない位置にあったということは、この画家を語る上で重要な要素となっています。

出品目録

資料名	員数	作者等	年代等	所蔵等
1.画業を見る				
郷里で活躍した画家				
山水画				
1 板絵着色 関羽図扁額	1面	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	栗東市 小槻大社蔵
2 絹本着色 高士帰隠図	1幅	岡笠山筆 / 柴野碧海賛	江戸時代 文化10年(1813)	個人蔵
3 紙本墨画 漁夫帰山図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵(草津市 個人旧蔵)
4 絹本着色 深荘訪友図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
5 紙本墨画 深山行楽図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
6 絹本着色 柳橋文人図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	個人蔵
7 絹本着色 瀑下洗馬図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	個人蔵
8 絹本着色 夏景山水図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
9 紙本淡彩 深声談話図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
10 紙本淡彩 秋景山水図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
11 紙本淡彩 浅絳山水図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
人物画				
12 絹本着色 騎馬四老図	1幅	岡笠山筆 / 香川景樹賛	江戸時代 19世紀	草津市 個人蔵
13 紙本淡彩 羅漢図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
14 紙本淡彩 承仕法師図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	栗東市 個人蔵
15 紙本淡彩 漁樵図	双幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
16 紙本淡彩 山樵聴笛図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
花鳥画				
17 紙本墨画 墨梅図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵(湖南省 愍念寺旧蔵)
18 紙本墨画 墨梅図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 文化13年(1816)頃	栗東市 個人蔵
19 絹本墨画 雪梅図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	大津市 個人蔵(草津市内伝来)
20 紙本墨画 墨梅図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	栗東市 個人蔵
21 絹本着色 双松猛虎図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	大津市 個人蔵
22 紙本淡彩 立鶴図	1幅	岡笠山筆	江戸時代 19世紀	館蔵
2.周辺を探索				
東海道と目川田楽				
23 東海道人物志(昭和29年復刻版)	1冊	大須賀鬼卯編	近代[江戸時代 享和3年(1803)刊]	館蔵
24 現故漢画名家集鑑	1舗	大島恭凡例	江戸時代 安政4年(1857)頃刊	館蔵
25 菜飯・豆腐田楽(複製品)	1膳		現代	栗東市 岡自治会蔵
26 東海道名所図会 巻二	1冊	秋里籬島編	江戸時代 寛政9年(1797)刊	館蔵
27 東海道五十三次之内 石部(復刻版)	1枚	歌川広重画 / 保永堂版	近代[江戸時代 天保4年(1833)頃刊]	館蔵(里内文庫 306-78)
28 元伊勢屋借受願書	1通	上依村借主新七ほか差出	江戸時代 寛政12年(1800)7月付	館蔵
29 元伊勢屋永代譲渡状	1通	岡村元伊勢屋孫四郎ほか差出	江戸時代 安政5年(1858)10月付	栗東市 個人蔵
交友を求めて				
30 絹本着色 桜に小禽図	1幅	藤原雪山(月亭齋)筆	江戸時代 19世紀	館蔵
31 絹本着色 柳鷺図	1幅	大倉笠山筆	江戸時代 19世紀	栗東市 個人蔵
32 土鍋焼台:行平断片	一括	地山古墳窯跡(地山窯)出土	江戸時代 19世紀	栗東市教育委員会蔵
コラム展示 岸派の粉本				
参1 紙本墨画 竹虎図屏風模本	4副1舗	岸駒原図	江戸時代 19世紀	個人蔵(岸派絵画資料 12)
参2 紙本淡彩 樵夫山水図模本	1舗	岸駒原図	江戸時代 文化4年(1807)模写	個人蔵(岸派絵画資料 39)
参3 紙本淡彩 馬師皇図模本	1舗	岸駒原図 / 近藤有芳模写	江戸時代 天保3年(1832)模写	個人蔵(岸派絵画資料 68)
参4 紙本墨画 唐人物に虎図模本	1舗	岸駒原図	江戸時代 19世紀	個人蔵(岸派絵画資料 98)
*参...参考出品。				

凡例

- この解説集は、特集展示「岡笠山～蕪村風絵画の継承～」における展示解説を編集したものである。PDF版を当館ホームページで公開する。
- 展示企画は本館学芸員・中川敦之と同資料調査員・隅川明宏が担当した。ただし、解説集の執筆・編集は隅川が担当した。
- 掲載写真は当館が撮影したものである。PDF版解説集の印刷に供する以外、無断での転載を一切禁じる。

主な参考文献

【展覧会図録】

- 『企画展 岡笠山と横井金谷 栗太の文人画家』 栗東歴史民俗博物館 平成3年[1991]
『企画展 近江湖東・湖南の画人たち』 栗東歴史民俗博物館 平成11年[1999]

【単行本】

- 滋賀県栗太郡役所編（山本清之進編）『栗太郡誌』乙編 滋賀県栗太郡役所 明治38年[1905]
滋賀県栗太郡役所編（中川泉三編）『近江栗太郡志』巻三 滋賀県栗太郡役所 大正15年[1926]
栗東町史編さん委員会編『栗東の歴史』第2巻[近世編] 栗東市役所 平成2年[1990]
栗東町史編さん委員会編『栗東の歴史』第4巻[資料編] 栗東市役所 平成6年[1994]
『東海道人物志・賀筵雲集録 復刻版』 羽衣出版 平成20年[2008]

【論文】

- 佐々木進「栗東の文人画家「岡笠山」について 活躍期の再考」(栗東歴史民俗博物館編『年報 平成2・3年度』平成5年[1993])
石丸正雲「近江における蕪村派の系譜」(宇野茂樹編『近江の美術と民俗』 思文閣出版 平成6年[1994])
稲垣正宏「滋賀県栗太郡栗東町地山古墳の近世竊跡について」(滋賀県文化財保護協会編『紀要』第14号 平成13年[2001])
隅川明宏「岡笠山の山水・人物 近江における蕪村風絵画の様相について」(『栗東歴史民俗博物館紀要』第19号 平成25年[2013])

【岸派粉本関係】

- 岩佐伸一「岸大路家所蔵 岸派絵画資料について」(『栗東歴史民俗博物館紀要』第7号[岸大路家所蔵 岸派絵画資料調査報告] 平成13年[2001])
小久保啓一「岸家伝来の絵画資料」(『特別展 写された絵 遺された絵 岸駒・岸岱 岸派絵画資料をめぐって』展覧会図録 富山市佐藤記念美術館 平成24年[2012])

謝辞

特集展示開催に当たって、所蔵家の皆様にご高配を賜りました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

特集展示 岡笠山～蕪村風絵画の継承～（解説集）

発行 平成25年4月

編集・発行 栗東歴史民俗博物館

滋賀県栗東市小野223-8

TEL 077-554-2733 FAX 077-554-2755